



▲熊本県在住の70代後半の夫婦にトラベルヘルパーが同行。約20年ぶりの京都観光で紅葉や街並みを満喫した。観光地は車いすでも行けるところをあえる倶楽部が提案した。

「そんなに大変な思いをしてまで、出
かけなくてもいいでしょう」
介護が必要な人の思いを知らない人か
らは、そう言われることがある。言う方
に悪気があるわけではなく、むしろ本人を
気遣ってのことだ。しかし、そうした何
気ない言葉が周囲の意識に壁をつくり、
要介護者の外出を阻んでいるのも現実
だ。

第1回 安全で快適な旅のために①

心の奥底で「もう一度旅をしたい」

トラベルヘルパーの育成をはじめ20
年になる。当時を振り返れば、看病はあ
っても介護という言葉もなかった。しか
し、旅行者の高齢化は社会のそれより早
くはじまっていて、サービス現場はいわ
ゆるバリアフリー旅行の必要性を感じて
いた。
観光旅行に出かけるには時間とお金が必要で、それらを自由に手にできるのは
子育てや仕事を終えたシニア層だ。そう
した人が、先の東京五輪の年にはじまった
海外渡航の自由化や高度経済成長を経

安全! 快適! **介護旅行**
SPIあ・える倶楽部社長
篠塚恭一



1961年千葉市生まれ。大手旅行会社の
添乗員を経て91年(株)SPI設立。ホ
スピタリティ人材の育成派遣に携わ
る。95年よりトラベルヘルパーの育成
をはじめ、旅のユニバーサルデザ
イン、介護旅行「あ・える倶楽部」の普及
に取り組む。06年NPO法人日本トラ
ベルヘルパー(外出支援専門員)協会設
立。著書「介護旅行に出かけませんか」
(講談社)他。(株)SPI あ・える倶楽部
代表取締役社長。NPO日本トラベル
ヘルパー(外出支援専門員)協会理事長

介 護

て、リタイア後の熟年旅行を謳歌してい
た。ところが、そうしたライフスタイル
も10年、20年と続けるうちに年齢は70
を越え、足腰に痛みがでてきて日常生活
もままならなくなる。それを苦にあきら
めてしまえばそれまでだが、一旦豊かさ
を知った人は心の奥底には「もう一度旅
をしたい」という願いを隠して言い出せ
ないままだった。健康に不安を感じ、介
護が必要になれば行動範囲はさらに限ら
れ、その思いはなおさら募った。
トラベルヘルパーをはじめそうした
人の思いを理解し、重いスーツケースを
持つ助けとなればいいと考えていた。し
かし、障がいを持つ人の旅に知恵を借り、
その経験を聞き、現場を訪ね、手探りで
プログラムを作っていくうちにもっと大
きな課題の存在を感じるようになる。世
の中はまだ、そうした人の旅を喜んで受
け入れてくれるような雰囲気にはなっ
ていなかった。そこから介護旅行へのチャ
レンジが始まった。